

日本経済を再生するゼブラ企業

日本はユニコーン企業小国

『旧約聖書』にも登場するユニコーンという動物は頭部に一本の長い角のあるシカのような動物であるが、実在するものではなく古代ギリシャ時代に想像された動物で、希少な存在を表現する言葉としても使用されてきた。このような背景から、過去一〇年以内に創業され、現状では株式市場に上場していない技術関連企業で、企業評価金額が一〇億ドル以上になっている企業を希少であるという理由でユニコーン企業と命名するようになった。

この言葉が登場した二〇一三年の時点では世界に三九社しか存在しなかったが、二〇一七年に二六九社、二〇一八年に三八五社、二〇一九年

に四九一社、二〇二〇年に五六三社、二〇二一年に八三二社と急速に増加し、二〇二二年に一〇〇〇社を突破して今年六月には一六〇三社のユニコーン企業が存在するまでに拡大してきた。社会がインフレ傾向にあることも影響しているが、起業精神が世界に浸透してきた潮流を反映している。

どのような企業であるかを理解していただくために、今年六月の時点で企業の評価価値が上位のユニコーン企業を紹介する。一位は「アンソロピック」(米国)、二位は「オープンAI」(米国)、三位は「バイトダンス」(中国)、以下「ストライプ」(米国)「データブリックス」(米国)「ヴァストデータ」(米国)「リヴオリュート」(英国)「ディープシーク」(中国)「シャイン」(シンガポ

ル)「ランプ」(米国)となっている。

ここまで紹介しただけでも米国に多数存在していることが明瞭であるが、国別で紹介すると、前述の世界全体に存在する一六〇三社のうち米国に五〇%、中国に二四%、ヨーロッパに一一%と米国の企業が圧倒している。日本は残念ながら人工知能関連の「サカナAI」「プリファード・ネットワークス」「スマートニュース」など数社が登場するだけで、世界全体ではわずかしがなく、この現実の改革が重要な課題である。

世界最多の 長寿企業の存在する日本

ユニコーン企業が利益拡大を目指す組織であるならば、それと反対に長期に存続することに価値のある企

業が存在する。この長寿企業とか老舗企業と名付けられる会社のうち、創業二〇〇年以上の歴史のある企業は日本に一三八八社(世界全体の六五%)存在し、二位の米国の二六五社(二二%)、三位のドイツの二二三社(一一%)、四位の英国の八一社(四%)、五位のロシアの三八社(二%)と大差の世界一位である。

ここまで紹介してきたように、日本は短期の利益を獲得することを重要な目標とするユニコーン企業では世界で大幅に出遅れている一方、利益よりも長期に存続することを重要な目標とする企業が世界で最大に存在する社会である。しかし、強欲資本主義とでも名付けるべき利益第一の経営理念が蔓延する社会で、多数の長寿企業を維持してきた日本の経済社会が今後、どのような方向に進展していくかは重要な課題である。

長寿企業と共通する ゼブラ企業

その回答の先頭にあるのがゼブラ企業である。ゼブラ企業という発想

は、現在の世界の企業社会を席卷する短期の利益、独占の志向、株主の優先を目標とする経済社会が世界に蔓延していく状況を問題とした、アメリカの四人の女性社長が二〇一七年という最近に創設した「ゼブラズ・ユナイテッド」という組織が基盤になっている。ここでは社会貢献と事業成長という目標を両立することを、ゼブラ(シマウマ)の白黒の模様に対応させている。

その運営理念は、(一)売り上げや利益の拡大を目的とせず社会課題解決を事業目的にする。(二)多額の資金により短期で事業を推進するのではなく、地域社会と共同で持続可能な成長を推進する。(三)短期で株主の利益を増大するのではなく、さまざまな人々が幸福を実感する経営をする。(四)理念ではなく設定した具体目標の実現を目指して行動する、と要約できる。現在、世界各地に七〇以上の支部が結成され、多数の人々が会員として活動している。

これは文化の相違により多少の表現の相違はあるが、前述した日本の

長寿企業の理念と共通する。何例かを紹介すると、(一)明確な経営理念を社員全員が共有する。(二)社員は雇人ではなく人財として育成する。(三)地元住民や取引企業と信頼関係を基礎に商売をする。(四)短期の利益ではなく安定した経営基盤の構築に利益を充当する。(五)社会の変化に対応して柔軟に事業や組織を変化させる、などが挙げられる。

現存する日本最古の企業は、大坂の四天王寺を建立するために聖徳太子が百済より招聘した三人の大王の一人である金剛重光が五七八年に創業した金剛組である。現在では高松建設の関連会社となっているが、一四五〇年間の歴史は継承されている。最近では欧米社会の経営理念が世界を席卷しているが、前述したように二〇〇年以上の歴史のある企業が断然多数存在する日本は、この歴史を継承していくべきである。

東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男



昭和一七(一九四二)年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究するとともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。